

## 福岡県の主な農産物の生産状況

令和3年3月15日現在  
(専技情報より抜粋)

### ◇麦類◇

11月下旬播きの生育は、1月中旬以降が高温に経過したため、平年より5～7日程度早かったです。出穂期は、11月下旬播きで3月下旬～4月初旬頃と予想されます。

排水口の手入れや枕地作溝、溝さらえ等の排水対策を徹底しましょう。「ラー麦（ちくしW2号）」「ミナミノカオリ」は、穂揃い期追肥の準備を行いましょう。葉色が淡いほ場や生育旺盛なほ場は、基準量より窒素1～2kg/10a増量しましょう（尿素の葉面散布は除く）。赤かび病の対策は、小麦とはだか麦では開花期、大麦では蒴殻抽出期に実施しましょう。赤かび病に弱い品種や多発生が予想される場合には、7～10日後にもう一度実施しましょう。

### ◇アスパラガス◇

保温開始は1月中下旬頃で平年並でした。若年生株で1月上旬、多年生株で1月下旬に出荷開始しました。数量は順調に増加し、春芽の出荷最盛期は3月上中旬の見込み。3月中旬から立茎開始です。販売面では、コロナ禍の影響で、業務需要が停滞傾向であるとともに、2月中旬以降、九州各県の出荷が集中し、販売単価が下落傾向です。病虫害の発生は少ないですが、一部でアザミウマ類の発生がみられます。

ハウスの温度管理は、日中に30℃を超えないようにしましょう。立茎時期は、出荷量の減少や収穫物の太さ等で総合的に判断し、遅れないようにしましょう。病虫害対策を徹底しましょう。

### ◇冬春ナス◇

2月中～下旬に出荷量の大きな山ができ、現在、出荷量は減少傾向です。そのため、2月末は草勢が低下し、首細果や曲がり果が多かったです。草勢は回復してきていますが、まだやや弱い状態が続いています。開花前～開花期が多く、肥大期の果実が少ないため、芽の吹きは良く、果実品質も良くなっています。3月下旬以降、出荷量が増加する見込みです。

病虫害は、灰色かび病やすずかび病が散見されます。アザミウマ類は天敵利用により少ないが、コナジラミ類が増加傾向です。

温度上昇に伴い、側枝の回転がよくなるので、かん水や追肥の回数を増やしましょう。4月以降、出荷量の増加に伴い、摘葉や芽の整理を徹底しましょう。換気、湿度管理、発病葉の持ち出し等により病害対策を行いましょう

### ◇イチジク◇

加温栽培「とよみつひめ」の生育は、展葉7～9枚で昨年並み～やや早く推移しています。

発芽は、無加温栽培では3月中下旬、露地栽培では4月中旬で、昨年よりやや早い見込みです。今後、露地栽培では晩霜被害が懸念されるため、対策を徹底する必要があります。

加温ハウスでは夜間は15℃前後を確保、日中は30℃以上にならないよう、こまめな温湿度管理を徹底しましょう。露地栽培ではアルミ蒸着フィルム等を用い、晩霜対策を徹底しましょう。

◇トルコギキョウ◇

1～2月の出荷量は作付面積の減少や12～1月上旬までの冷え込みにより平年および前年よりも2～3割少なくなりました。また、販売単価は緊急事態宣言の影響により低くなりました。春出荷（3～5月）作型の生育は、暖冬だった昨年よりも遅れていますが、平年並みであり、本格的な出荷は3月下旬から開始され、出荷ピークは4月下旬から5月上旬になる見込みです。

品質向上、出荷期の省力化のため、ほ場での芽摘みを徹底しましょう。花の小輪化を防ぐため開花期は夜温を12℃以上で管理しましょう。斑点病、灰色かび病は、換気や湿度管理等の対策を徹底しましょう。

◇畜産◇

2月の肉牛枝肉単価は、過去5年平均水準並みでした。首都圏、関西、東海、福岡と緊急事態宣言の発令により、内食消費拡大のため価格は安定しました。今後、首都圏の緊急事態宣言の延長により、外食消費低下が懸念されます。

幼畜の防寒対策は継続しましょう。鳥インフルエンザ等家畜伝染病が発生しているため、飼養衛生管理基準を徹底しましょう。